

日^ひ
吉^{よし}
神
社
由
緒

まえがき

最近、巷に「ふるさとの祭り」とか「ふるさとの味」という言葉が氾濫していることはご記憶のことと思いますが、「ふるさとの……」には私達が住んでいる郷土（ふるさと）の心のよりどころ、或いは誇らしげに他に自慢することのできる唯一のものを強調した言葉であると思います。

郷土に生を享け、そしてはぐくまれ、郷土である此の町を何時までも私達の心に受けとめて、機会ある毎に「ふるさと」の行事（例えば、お祭り見物とか、盆踊りなど）に参加したり「ふるさと」の氏神様へお詣りをして、その年の無事安全を祈念したりすることは、心の中に何時までも我が郷土のふるさとを誇らしげに自慢することの出来るものを想い出すからではないでしょうか。

我が郷土「ふるさと」の、他に自慢すべき由緒ある氏神さま、日吉神社について記してまいります。

目次

一、鎮座地	2
二、神社名	2
三、主祭神	2
四、祭儀（祭礼）	3
五、社殿	5
六、境内構造物	8
七、宮司就任	9

一、鎮座地 東京都昭島市拝島町一丁目一〇番一九号（電話 FAX 〇四二一五四四一〇六三六、五四一一一三四三）

二、神社名 日吉神社（御本社は、滋賀県大津市坂本町に鎮座する山王総本宮日吉大社です。）

三、主祭神 大山咋命、羽山戸命、香山戸命（地鎮祭や農林殖産、安産、芸能などの除災招福の神さまです。）

祭神大山咋命は大年神の御子で、一に山末之大主命とも申し、御母は天知迦流美豆比売であります。近江の国の比叡山延暦寺（天台宗）と密接な関係があるのです。古事記によりますと、「大山咋命は日枝山（現在の比叡山）に鎮ります」と記されてある通り、神代の昔から大山咋の神の霊峰として深い信仰が傾けられている日枝山が、昔、都が京都に定められた時、都の良（東北）即ち鬼門に当り、その上伝教大師がこの霊山で天台宗を開いて皇城（京都）の鬼門除けとして、又鎮護国家の大道場として日枝の大神（大山咋の神）をその守護神として崇めたところから、日枝の神（大山咋命）は魔除けの神として全国に知れ渡っているのです。「大山咋の神の『咋』という字は『主』という言葉である」と江戸時代中期の国学者として有名な本居宣長が解いているように、山林の主の神であるとともに、地主の神、農林殖産、安産、芸能などの神として、何時しか「山王さん」と親しまれて呼ぶようになりました。その日枝山（比叡山）の麓には日枝の大神を祀る山王総本宮日吉大社が鎮座し、その御分霊をお受けする神社は全国で三千八百余社ありますが、東京の「赤坂の山王さん」（赤坂の日枝神社）と同様に「拝島の山王さん」（日吉神社）と親しまれております。

羽山戸命と香山戸命の二神は大山咋命の御弟であり、羽山の意味は端山、即ち端山処の神で、山の主宰

に功德くどくの多い神であります。大津おおつ氣比けひ売めとを娶めとり、若山わかやま昨命まけを始め、八神の御子を生まさせ給うたと神話に記してあります。香山かがやま戸命とめは山里開発について功德くどくのあつた神で、山戸やまどとは「山に住む民の里」という意味で、即ち山里のことであり、香かは「香かおり芳かんばしく輝く」という意味であるから、山里を開墾するのに功德のある神ということでもあります。従つて、日吉神社の祭神は山及びこれに連らなる原野開墾の神、地主の神、安産・芸能・鬼門除け（魔除け）即ち、除災招福の守護神ということができのです。

四、祭儀（祭礼）

（奉納囃子は昭島市無形文化財（技芸）として昭和三十九年十二月十日に指定され、榊祭りは、東京都文化財（郷土芸能）として昭和五〇年二月六日に指定される。）

日吉神社は旧拝島村の総鎮守山王社として江戸時代の初期より現在地に鎮座されておりますが、桜町天皇の寛保元年（一七四一年）九月五日に宗源宗旨を受け、爾来、山王大権現さんのおうだいこんげんの称号を許されたのであります。この時氏子一同がその榮譽を記念して社殿の修築、境内の整備、神輿の新造を計画して、毎月一人一文の積立を始めましたが、これが後桜町天皇の明和四年（一七六七年）になつてやつと実を結びましたので、その年の九月十九日（山王祭礼は九月の中の申さるの日が吉例であり、この日が丁度その日に当たりますが、現在では九月の十九日に最も近い第三日曜日ということにしております）に新造の神輿を奉納し、祭礼道具一式を整えて盛大に神輿渡御の式典を挙行しました。これらの事は普明寺所蔵の「山王祭礼図絵さいれいずえ」一卷につまびらかであります。山王祭礼は、これを第一回として毎年行われる例となつて、この時に新調の神輿及び祭礼道具一切を使つて、その行列も昔通りに行われて現在に至つております。

この時の神輿渡御の行列を見ますと、先頭にはお囃子はやしの一组を乗せた山車が加わっていますが、これが現在の奉納囃子の始まりで、年と共に益々盛大となり、村を分かつ賀美・奈賀・志茂かみ なか しも（現在の土上町・中町・下町）がそれぞれ重松囃子・神田囃子・目黒囃子と独特の囃子を伝承して互いにその技を競い合い、明治時代になつてからは、山車も三部落が各々新造して祭礼着などもそれぞれに意匠をこらして、その研を競つたようなことでした。特に、賀美町の重松囃子じゅうまつばやしは全関東お囃子コンクールで三年連続優勝の栄をにない、またNHKテレビ（宮田輝司会、渡辺紳一郎、藤原アキ（故人とられました）の解答陣による「それは私です」）を通じて全国に紹介された経歴もありますので、地元ではこの由緒伝承を永く後世に伝えるために、「拝島町日吉神社奉納囃子保存会」（会長 榎本 武）を結成して、鋭意その趣旨貫徹を図っています。

昭島市においても、その保存育成を援助する意味において、昭和三十九年十二月十日付で昭島市無形文化財（技艺）として指定し、昭和四八年九月の祭礼には十六ミリ（カラー八ミリ版編集、同時録音）の記録映画を撮影して、記録の保存と後継者の育成を図っております。

神輿の渡御は真昼（午後一時）より執り行なわれておりますが、神の渡御（神祭り―神輿渡御の真夜中（現在では午前一時）に行われております）は先ほど申し上げたように、除災招福、魔除けを祈念して、村人達が身体を淨めて心をこめて奉仕し、木杵を組んでその中に土俵（昔は二、三百貫を越えたということですが、現在では百貫から百五十貫位 ― 四〇〇 kg 〓 四五〇 kg―の重さ）を積み上げてそれに神の枝を植えてこんで神の大木に仕上げ、それぞれの神の葉の一枚々々に紙垂しだれ（しめ）をつけ、最後に御心ごしん（神）筒とう（主祭神である魔除けの神の大山昨命おおやまのの降り坐おしたことを表わす御神木で、紙垂しだれ（しめ）を

大きな束にして麻で結びつけ、それを榊の大木の真中に植えつけたもの（を立てて、これらを神輿の代りに村の若い青年達が担いで神輿の渡御の先導（先払い）と言つて、神輿渡御の順路を清めて厄払いする意味）の役目を果たしております。しかし、前に述べました「山王祭礼図絵」では、榊の渡御については詳らかではありませんが、多分後世になって疫病の大流行のために無病息災（魔除け）を祈願した村人達の生活の知恵が「榊かつぎ」となつて実を結び、年々盛大となつて、現在では前夜祭の最たる行事の一つとして「榊祭り」と呼ばれるようになっております。その「榊祭り」の圧巻とも言つべき「榊取り」は、村中を隈なく渡御し終つた榊の大木を社前に奉納してから、村人達が榊の小枝や御心（神）筒をもぎ取つてそれぞれの家の神棚に奉納し、そして家内安全、無病息災を祈念したもので、現在もその伝統を受け継いでおりますが、この榊の渡御（榊祭り）、神輿渡御の行列と奉納囃子の山車の巡幸の三大神幸を以つて日吉神社の例大祭の神事として、近郷近在にその名を知られているのです。なお、榊の渡御などの三大神幸の行事は、去る昭和五三年に第一二チャンネルより、東京都提供の『東京レポート』、午前〇時、俺達の祭り―榊祭り』として放映され（また十六ミリ記録映画フィルムとして保存してあります）、ひろく都民に紹介されております。（東京都無形文化財「郷土芸能」として昭和五〇年二月六日付で指定される）

五、社殿 流造

（本殿、桁行一丈一尺、梁間七尺）
（拝殿、桁行三間半、梁間二間半）

一、第一回の再建

前述のように寛保元年（一七四一年）九月五日に山王大権現の称号を賜つた榮譽を記念として氏子一人毎月一文の積立を始めた結果、明和四年（一七六七年）に御社殿を再建し、その完成を記念して神輿を新造して奉納し、第一回の祭礼を行なったのです。

二、第二回の修復

嘉永四年（一八五一年）九月一日に、現拝島町在住の（株）伊藤組社長 伊藤孝七氏の先祖に当る伊東兵部藤原公班（伊東紋藏）を棟梁として起工し、翌嘉永五年（一八五二年）九月九日に竣功し、安政二年（一八五五年）九月には御社殿（拝殿・神楽殿・幣殿）の修築と鳥居・御神橋の再建完成の大法要を営んでおります。（※御社殿の神楽殿は、現在は幣殿に転用され、神輿を安置してあり、幣殿は現在の御本殿に相当するものであり、鳥居は当時は木製で、拝島天神社に移築されて現存し、御神橋は現在、十六号線沿いの参道入口の石橋として現存しています。）

なお、御本殿の彫刻は、現拝島町在住の谷部憲彦氏の先祖に当る彫師矢部建次郎良長の作であり、その下絵（設計原図）も現存しています。彩色は、現拝島町在住の谷部八郎氏の先祖に当る塗師谷部重次郎の作であり、共に彫刻と極彩色の妙は定評のあるところです。又拝殿の格天井の花鳥画は、秋元但馬守藩の絵師坪山洞山の筆になるものです。近在にもその類を見ない傑作として有名であります。（一八五五年完成）

三、第三回の修復

昭和四三年（一九六八年）に明治百年の佳き年を記念し「拝島日吉神社御社殿復元奉賛会」（会長 宮岡文平）を結成して、御本殿の彫刻彩色の復元と神輿の修復彩色（青梅市在住（株）喜楽屋の施工）を完成して記念式典を挙行しております。

四、第四回の修復 平成十七年九月（二〇〇五年）

平成十七年「日吉神社平成保存修理委員会」（委員長 臼井銀次郎）を結成し、東京都補助金並びに氏子各位、篤志家の寄付により、平成二十年七月完成する。平成二十一年四月、落成式典・祝賀会を挙行。

施行会社・大成建設株式会社、田中社株式会社

修理工事の概要

事業概要

- 一 事業名称
大日堂境域及び日吉神社境域復旧(内日吉神社)事業
- 二 所在地・所有者
所在地 東京都昭島市拝島町一丁目一〇番十九号
所有者 宗教法人 日吉神社
- 三 建立年代
本殿 天保頃(一八三〇～四四)
幣殿・拝殿 安政二年(一八五五)

四 指定区分

東京都指定史跡

五 修理方針

本殿

屋根葺替・塗装・部分修理

幣殿・拝殿

屋根葺替・部分修理

六 事業期間

平成十七年九月一日から平成二十年七月三十一日まで(三十五ヶ月)

七 工事期間

平成十七年十月一日から平成二十年七月三十一日まで(三十四ヶ月)

八 事業費

一二六、五七四、五〇〇円

日吉神社は、旧拝島村の総鎮守山王社として、江戸初期より現在地に鎮座すると伝えられている。また、隣接する大日堂(旧蜜巖浄土寺)の諸堂とともに「古刹」として著名な大日堂と天台宗の守護社によって形成され、歴史的建造物を中心に旧態をよくとどめ、典型的な天台宗一規一画の寺域を構成する都内でも数少ない場所の一つである」として、平成四年三月三十日東京都の史跡として指定を受けた。

日吉神社境域の修理事業は、平成十三年から同十七年まで行われた大日堂境域の保存修理事業に引き続き実施された。事業理由として、日吉神社本殿彫刻はペンキが塗られ文化財としての価値を損ねていると共に、拝殿・幣殿は経年による破損に対して保存修理及び防災設備の改修・設置を実施することで今後の建物の保存と活用を図り、大日堂境域と一帯をなした文化財としての価値が高まり、都民の文化的向上に資することが出来る、ということと東京都の補助事業として着手することになった(事業期間・工事期間は上記のとおり)。

史跡としての現状変更許可申請書を提出、平成十七年十二月十七日付けの許可を受けた。

工事は、施工業者を指名競争入札のうえ決定して実施し、事業にかかる設計監理業務については、財団法人文化財建造物保存技術協会に委託して実施した。

建物解体後、調査に基づき建物としての現状変更許可申請書を平成十九年二月二十六日提出し、三月九日その許可を受け、工事はこの方針に基づき実施され、平成二十年七月完了した。

六、境内構造物

第一鳥居・社名標・御神燈

昭和五二年十二月「第一鳥居建設委員会」を結成して（有）おおすみ大角石材工業の施工により、社名標（昭和五三年二月）御神燈（昭和五三年九月）を建立し、竣功式典を挙行する。

第二鳥居・御神燈

大正十二年二月十五日

建立する。

玉垣

大正三年十二月十五日

財施者 江戸神田蟬〇町駿河屋利兵衛、同本町三丁目〇明屋清兵衛、同伊勢

狛犬

昭和四八年五月五日

拝島石材店の施工により建立する。

由緒板

昭和四四年三月

臼井佐一氏の施工により建立する。

手水舎

明治二八年九月

臼井要作・目黒平吉両氏の寄付により、所澤町高橋小八の施工により建立する。

授与所

昭和五四年十二月三十日

（有）北林工務店の施工により建立する。

境内末社

稻荷社・水神社・諏訪社の三社を祀っている。

手水舎・水盤の新調

水盤

平成二十年九月（二〇〇八年）

寄贈者、臼井勉氏、目黒惟夫氏 施工有限会社 広野石材店

手水舎

平成二十年九月（二〇〇八年）

神社総代（早野芳雄氏・小林秋雄氏 他数名）により施工

鋳金工事、大江鋳金店

神輿舎

平成二十二年四月（二〇一〇年）

施工 滝野建設株式会社

相殿（移動及び屋根葺替え）

平成二十二年（二〇一〇年）

施工 大江鋳金店

御仮屋（改修）

平成二十二年三月（二〇一〇年）

神社総代（早野芳雄氏・小林秋雄氏 他数名）により改修

絵馬掛・おみくじ結び所・国旗掲揚塔（増設・修理・塗装）

平成二十二年七月（二〇一〇年）

七、宮司就任

平成二十二年七月（二〇一〇年）

橋本昇宮司就任

橋本誠 前宮司 名誉宮司就任

昭和48年 9月16日 第一刷発行
昭和55年 5月 5日 第二刷発行
平成 9年12月25日 第三刷発行
平成26年 5月 5日 第四刷発行

発行者 日 吉 神 社

東京都昭島市拝島町5-10-36番地

電話・FAX 042 - 544 - 0636
541 - 1343